

2015

夏

さいき日和

地域支援員だより

特集 アイガモが行く！

＝ さいきのアイガモ農法 ＝



「アイガモ農法」という言葉は知っていても、実際に見たことがある人は少ないだろう。

「アイガモ農法」は、アイガモをパートナーに米作りをする農法で、害虫防除、雑草防除、稲への刺激、養分の補給、かくはん作用などが期待される。

今回は友和地区で「アイガモ農法」の米作りをしている新久睦男さん春美さんご夫妻にお話を伺った。



今年は、アイガモを呼んだら、そばに来るようにしつけたとのこと。

普段エサをやっている陸男さんが手を叩くのがいちばん効果があるという。

春美さんの大切なギャラリィ。はまぐりの貝殻を使ったお雛様を、遠方から見に来る人がたくさんいる。お菓子の箱や包装紙、リボンなどは大切に取っておいて作品に活用する。



古いミシン台はガーデニングのアクセントとなっていて、見る人の目を楽しませてくれる。大好きな牡丹や山野草…季節の花々とマッチした庭も素敵だ。

特集 アイガモが行く！



アイガモとの出会い

新久睦男さんとアイガモとの出会いは 22 年前に遡る。昔から有機農法に興味があったというわけではなく、きっかけは奥様の春美さんが交通事故に遭われたからだそうだ。

それまで農業の大切な支えだった春美さんが事故で首の捻挫いわゆる「むちうち症」になり、田の仕事が難しくなった。

困っていた睦男さんに、職場の同僚が「田に入って草取りをしなくてもいい」と、「アイガモ農法」を紹介してくれ、さっそくひな鳥を世話してもらってとりかかったのが始まりだった。



アイガモを田に出すタイミングが決め手！

試行錯誤の日々

5 月初旬、ひな鳥は卵からかえってすぐに新家にやってくる。餌を食べ始めるまでが勝負で、夜には電球で体を温めてやり、世話にはやや神経を使う。寄って温まろうとする習性があるので小さく弱いひな鳥は圧死してしまうこともあるのだ。

餌を食べ始めて飼育小屋で飼うようになって、カラスや猫、イタチなどに狙われる。年によっては、ほとんど動物に取られてしまったこともあるという。

アイガモがまだ小さな稲を食べてしまったり、倒したりしないよう、稲とアイガモの育ち方を見て、田に出すタイミングを見極める。

アイガモたちが田にデビューしてからも、夕方には飼育小屋に戻るようにしつけする。睦男さんの足音がカモたちには分かるようで、餌をもらおうと飼育小屋に戻ってくるそうだ。

これらの試行錯誤の末、ようやく現在の形に定着し、今年は 1 羽も命を落とすことなく全員田にデビューしたという。

うれしい循環

失敗の経験もあったが、嬉しい効果もたくさんある。アイガモが泳ぐと地表がかくはんされてヒエも生えてこない。生えてきたとしても、アイガ

モが食べてくれる。害虫も食べてくれるので農薬を使わずに済む。アイガモが糞をするので肥料も使わずに済んでいる。アイガモを買って育てると、農薬と肥料を買うのでは、費用は同じくらいとのことだ。

アイガモの世話をするだけで、田にはほとんど手をかけない。餌はクズ米だけ。これも周りの農家から提供してもらうので、餌代は全くかからない。お世話になった人には、できたお米を食べてもらい、アイガモは貴重な食材として引き取られていく。まさに循環型の農法である。



今年は全員元気に田へデビュー！

ていねいな仕事の中にあるもの

「アイガモ農法」は年々減っているという。やはり生き物を飼うということはちゅうちょされる。必要に迫られて始めた農法ではあるが、誰にでもできるものではないということが、睦男さんの姿勢からも感じられる。



稲と一緒に大きくなるよ

飼育小屋はイタチなどから守るために頑強な作り。田の上に張ってあるカラスよけのテープも、しっかりとした仕事のあとが伺える。

また、飼育小屋の中にあるプールの水は水路からの水を取り循環させているので、食用になっても肉の臭みが無く、毎年アイガモの引き取り手は決まっている。

これらは睦男さんの、ていねいな仕事をするをいとわないフットワークの軽さ、そして口には出さないが、さまざまなものに対する愛情が見受けられる。そんなところが、「アイガモ農法」とマッチしたのではないだろうか。

「これからもっとこうしたいとか、やってみたいということはあるですか？」との問いかけに、「今のやり方が一番安定しとるもんでね、これ以上のことは何もすることがないと思うんです」と落ち着いた表情で話されるのが印象的だった。

(インタビュー 早川)

浅原もちつき～大会



昨年、浅原地区にて開催された「浅原もちつき～大会」の収益で、渡辺さんが浅原保育所の花壇に花を植えてくださいました。地域支援員も草抜きのお手伝いをさせていただきました。(横井)



まちづくりミーティングから生まれたプロジェクト「水と緑と虹のマルシェ」がスタートします。

夏の間、佐伯のまちで一番賑やかになる岩倉ファームパーク内ライトハウスにて野菜や雑貨などを販売します！(8月の土日9時～17時・15.16日は除く)販売の機会を通して「佐伯・吉和の

魅力をもっと知ってもらおう！」ということが大きなミッション。イベントや味覚狩りなど、旬の情報を集めたおたよりも発行します。ぜひ、賑やかしに來てください！

また、ご意見やご感想をいただければ、今後の開催に活かしていきたいと思っています。(早川)

水と緑と虹のマルシェ



会場の岩倉ファームパーク内ライトハウス

かきがら米プロジェクト

5 月 30 日(土)に修道大学の松川ゼミ 15 名が玖島地区を訪れました。テーマは「かきがら米の研究」です。最初に平谷の國広さんの田圃を見学し、昭和からの玖島地区の様子や農業の話を伺いました。

次に、保育園で実際にかきがらを処理しました。予想外にかきがらが硬く、砕くのが大変でした。

昼食をはさんで 15 時まで活動し、最後に友和地区の新久さんにアイガモ農法を学びました。

秋の収穫と成果発表のためにあと 2 回玖島地区で活動の予定です。

(上田・早川)



玖島のイチリンソウ

イチリンソウはキンボウゲ科の多年草です。

玖島地区にイチリンソウの群生地があります。地元の方に教えてもらいました。

農道横の法面に 200 メートルにわたって分布しており、人里でこれほど大規模な自生はとても珍しいことです。

見ごろが 4 月中旬なので、大峰まつりにあわせて楽しんでください。

この他にも玖島地区にはオキナグサ、ナデシコなどの貴重な植物が自生しています。皆さんも地域を散策してみたいかがでしょうか。(上田)



大家さん インタビュー

今回は浅原地区にお住いのYさんから貸家にまつわる素敵なお話をお聞きすることができました。

結婚して間もないころ、ご主人が「家具屋をやりたい」と半年間、大工の見習いに通い、実家のある浅原地区にご自分で家具工場を建てられたそうです。それを機に家族で浅原地区に移り住むことになりお父さんの家と土地を相続されました。当時の工場と家は建て替えられましたが、実家は貸家として残っています。



—— お家を貸すことになったきっかけをおしえてください。

(主人の) 父が亡くなって、親戚は遠くに住んでいて管理できないからということで、相続するのはうちになってね。

父の家は使わなくなったから、親戚と相談して貸すことになったのよ。

—— お家に残っていた家具などはどうされましたか？

父の喪が明けてから、親戚で形見分けをしたあと、荷物を片付けました。

—— 仏壇や神棚はどうされましたか？

私たち夫婦は、結婚して3年目にやっと生まれた女の子を3時間で亡くしてしまっただけね。主人の家は代々神道だったけれど、仏壇を入れることを許してくれて、毎月住職さんにお経をあげてもらっていました。

父が亡くなったのを機に、私の実家に仏壇を引き取ってもらって、父の家の神棚を家にもってきました。

お世話になっているお寺や宮司さんに相談したら、自分でお塩とお酒とお米を用意してご挨拶をしたらいいよと教えていただきました。

—— 大きな決断でしたね。

早いって言われるかもしれないけど、子どもたちの負担にならないようにお墓も少しずつ減らしていかないとね。主人

や親戚がいなくなってしまうたら、どうしたらいいかわからないもの。

—— お家を貸してよかったことはありますか？

相続したのは私たちだけど、この家はみんなのものという思いが強いんです。だから法事にかかる費用にあてることにしました。

料理も作れるものは自分で作って、「お金は包まないでいいから」と言っておけば、誘いやすいし気楽に来れるでしょ。もし父の家と土地を処分していたら、親戚が集まって楽しく過ごすこともなかったかもしれないね。

亡くなったお父さんの家を活用して、親戚一同が仲良く過ごせるような工夫をされているところや、悲しい思い出を乗り越えて「今」を生きている、そんな姿に勇気をいただきました。

(インタビュー 横井)

編集後記

時代が変わり、世の中は便利なものであふれていますが、それでもまだ足りないと思いがちな現代の暮らし方。今回の特集や大家さんインタビューをとおして、「温故知新」という言葉が改めて心に沁みました。あるものを新しい発想と柔らかい心で活用することの素晴らしさを感じています。

「さいき日和」に関するご意見・ご感想をお寄せください。イベント情報もHPに掲載させていただきます。
HP <http://saikirainbow.wix.com/watasitatino>

編集・発行 地域支援員 早川幸江 横井美奈 上田晴彦
〒738-0292 広島県廿日市市津田 1989
廿日市市佐伯支所地域づくりグループ
TEL 0829-72-1111

